武山米店　所在地は気仙沼市魚町一丁目１の13。明治30（1897）年ごろの創業で、米を中心に燃料も扱う。店舗はかつて八日町にあったが1900年に現在地に移転。敷地は間口が8・4㍍、奥は幅1・9㍍、南北の奥行き30㍍の細長い台形で面積140平方㍍。今の建物は魚町一帯で起きた大火（1929年）の翌年建築。店舗兼母屋と石蔵が今年２月９日、国の登録有形文化財に指定された。店先の見学は営業時間（午前８時半―午後６時、日曜除く）内は可能。日程調整の上で家の中も見学できる。問い合わせは0226（22）0266へ。

武山米店

（気仙沼市）

訪ねる

奥に行くほど狭くなる台形の2階和室。畳は台形、三角形の特注品だ

気仙大工の技光る

年月経て独特の風格も

昭和の古き良き面影を残す商家が多い気仙沼市魚町一帯。国の登録有形文化財（建造物）に四つの建物が指定されている。魚町一丁目の「武山米店」は、気仙大工の流れを組む匠の技が随所に光る。

（武山文英社長）の店舗兼家屋もその一つだ。最近、登録証と登録プレートの伝達を受けた。

店先から奥へ行くにつれて狭くなる細長い台形のような敷地に合わせて設計された木造二階建ての店舗兼母屋と、その奥に二階建て瓦ぶきの石蔵のが一部ある。

店の表の鋼板の看板文字や戸袋の装飾も見事だ。

店先の天井を見る。普通なら木材や板が直角、または十字に組まれているのだが、この建物は斜めにかかっている。二階和室の畳も端部分は三角形だ。柱にもひし形のも

使われている建材の質と、建具の重厚な作りや優れたデザインも目を引く。今では建材として入手困難な木材ばかり。黒い年輪の筋模様が浮き出た黒柿は床の間、丈夫な桜は階段、固いケヤキは手すり、土台にはクリと、まさに適材適所。

これらの建材は今も割れや腐食がなく、年月を経るごとに味や独特の光沢が出て、古さを感じさせない。現在は武山社長（五七）の両親、佐吉さん（八五）と栄子さん（七八）が暮らす。武山社長と妻のせい子さん（五五）は別にある自宅から店に通っている。

武山社長は「研究者に言われるまで気づかず住んでいました。古いので、もし資金があれば建て替えていただろう。今同じように材料をそろえて釘を使わずこの建物を再現することは困難だということなので、あらためて価値を実感しています」と話す。

実際の生活では、特別に高い天井の部屋は寒く、奥の狭い鋭角の部屋には不便さを感じることもあったが、今では愛着の気持ちの方が強いという。

栄子さんは「いびつなこの土地も、商売には末広がりで縁起がいいと、わざわざ買ったそうです。古くはなりましたが、本当に良い木材を使っていて、建てた人の思いが伝わってきます」と話している。

（菊地　利明）

リアスの風
2005 年 6 月 23 日